

『源氏物語』賢木卷における六条御息所との「暁の別れ」

吉海 直人

〔要旨〕 本論は『源氏物語』の時間表現論の一環として、賢木

卷における源氏と六条御息所の「あかつきの別れ」場面を取り上げ、「夕月夜」から「暁」に至るまでの時間の経過を丹念に読み解いたものである。特に「夕月夜」が「暁闇」の伏線となつて注目に値し、「明けゆく」をまだ暗い時間帯として論じてみた。

〔キーワード〕 賢木卷・暁の別れ・野宮・六条御息所・時間表現

はじめに

賢木卷は、『源氏物語』のターニング・ポイントになつてゐる非常に重要な巻の一つである。この巻には桐壺院の崩御や藤壺の出家など、源氏の人生において看過できない重要な要素

(事件) がいくつも含まれているからである。

その賢木卷には、二つの「暁の別れ」が描かれている。一つは源氏と朧月夜との別れであり、もう一つが源氏と六条御息所との別れである。本来ならばここにもう一つ、源氏と藤壺の「暁の別れ」を加えたいところであるが、こちらは「暁の別れ」の体裁になつていないので、重要ではあるものここで一緒に論じることができない。

本論では、嵯峨野(野宮)における六条御息所と源氏の特殊な別れに焦点を絞つて考えてみたい。なお賢木卷というのは、神社と縁のある神の木「榊」(国字)が巻名になつたものである。これは源氏が御息所に榊の枝を渡して歌の贈答をするところからの命名なので、この場面が賢木卷で一番重要なところといえる。

一、野宮の別れ

最初に少しばかり賢木巻の概略を説明しておきたい。前巻・葵巻で源氏の父桐壺帝が讓位され、弘徽殿腹の兄・一の皇子（皇太子）が即位して朱雀帝となる。これを契機に源氏の政治的不遇が始まる。それでも桐壺院が存命であるうちはまだ良かった。それは桐壺院がいわゆる院政を敷いていたからである。

その桐壺院が賢木巻で崩御され、さらに新皇太子（後の冷泉帝）の母・藤壺中宮も出家してしまう。政權は葵の上の父左大臣側から朱雀帝の外戚となった右大臣側に移り、頼みの左大臣も致仕してしまう。そのため源氏の昇進はストップしてしまい、源氏にとっては面白くない日々が続いた。

葵巻の天皇讓位に伴って齋宮の交代が行われた。六条御息所の娘が齋宮に卜定され、野宮で精進潔斎の日を過ごす。その後で伊勢に下向するわけだが、続く賢木巻ではそのことが、齋宮の御下り近うなりゆくまに、御息所もの心細く思はず。

（新編全集83頁）

と語られる。前巻の葵巻の車争いで屈辱を受けた御息所は、生

霊となって出産直後の葵の上を取り殺した。その折、物の怪となった姿を源氏に見られた御息所は、もはや源氏との関係は修復不能と判断し、自ら齋宮に卜定された娘に従って伊勢へ下向することを決意するものの、その内心は揺れていた。源氏にしても、葵の上に憑依した御息所を目の当たりにしたこと、御息所への愛情はもはや完全に冷え切っていた。残っているのは、いかに御息所と美しく別れるかである。これも物語では大なる事な要素なのだ。

しかし源氏はなかなか動かなかつた。齋宮の伊勢下向予定日が目前に迫った九月七日、源氏はようやく重い腰をあげ、六条御息所との最後の面会のために野宮（嵯峨野）を訪れる。しかし、それは面会（別れの挨拶）だけでは済まなかつた。というのも、源氏が野宮（神域）で一夜を過ごしたからである。本文にはまず、

野宮に参でたまふ。九月七日ばかりなれば、むげに今日明日と思すに、女方も心あわたしけれど、立ちながらと、たびたび御消息ありければ、いでやとは思しわづらひながら、いとあまり埋れいたきを、物越しばかりの対面はと、人知れず待ちきこえたまひけり。

（84頁）

と書かれている。御息所は源氏からの面会申し入れを拒否しつつも、源氏からの度々の消息を見て、内心では「人知れず待ちこえたまひけり」と、秘かに源氏の来訪を待ち望んでいた。そのことは、源氏の提案したせめて「立ちながら」でもという他人行儀な対面が、「物越しばかり」に変化（許容）していることから察せられる。これによって滞在時間が長くなった。

「立ちながら」というのは、病氣見舞いとか物忌みの折のやり方である。夕顔巻で死に穢れた源氏は「立ちながらこなたに入りたまへ」（173頁）といて頭中将と面会している。「物越し」というのは、御簾などを隔ててのやや他人行儀な対面のことであり、末摘花巻でも源氏との面会に「物越しにて聞こえたまはむ」（280頁）と設定されていた。それでも「立ちながら」よりはずつとましである。二人は表向き儀礼的な対面の中で、複雑な思いを抱きながら一夜を過ごして別れる。本論ではその「暁の別れ」の描写をあらためて分析してみたい。

二、『源氏物語』の名文中の名文

従来、源氏は忍び歩きの折には五、六人の従者を伴っている

ことが多かった。今回は「大将の君」という高い身分にふさわしく、「睦まじき御前十余人ばかり、御隨身」（85頁）六名という少なからぬ供を従えていた（その中に惟光や良清が含まれているかどうかは不明）。それはもはや「忍び歩き」とは呼べない供揃えの数ではないだろうか。

その源氏一行が嵯峨野に近づくと、『源氏物語』の中でも名文中の名文とされている文章が道行風に語られている。

はるけき野辺を分け入りたまふより、いとものあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれなる虫の音に、松風すごく吹きあはせて、そのことも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶えだえ聞こえたる、いと艶なり。

本文に「秋の花」とある。「春の七草」（七草粥）が食用の植物であるのに対して、「秋の七草」は観賞用の植物である、その中の「女郎花」が『古今集』以来、嵯峨野の代表的な秋の花とされている。ところで旧暦九月七日といえは、秋の紅葉がようやく彩りを添え始める頃なので、晩秋には多少間がある。それにもかかわらず、ここには「秋の花みなおとろへつつ」と、むしろ冬枯れの荒涼たる風景が広がっている。そのことは新編

全集頭注一七にも、「以下の情景は、九月上旬よりも冬枯れに近い感じ」とコメントされていた。これなど異常気象、あるいは暦のずれなどで説明すべきものではあるまい。

この季節のずれに注目すると、どうやら源氏が「分け入」つているのは、表向き雑草をかき分けて進んでいるように見えながら、それは同時に御息所の心の中に分け入る意味も含まれている。源氏は嵯峨野に向かっているのであるが、実のところ既に御息所の心象風景の中に入り込んでいたのである。新編全集の頭注一九にも、「このあたり不毛の意の心象風景」と記されているし、「嵯峨野の秋色は、もの思う人御息所の心象の風景でもある。源氏の気持はおのずから引き込まれてゆく」（86頁）とも記されている。要するに荒涼としているのは、嵯峨野の情景というより御息所の心なのである。こういったいわゆる情景一致の描写は、桐壺巻の野分章段など『源氏物語』にしばしば用いられている手法の一つであった。

それに続いて、野宮の方から聞こえてくる「琴の音」に注目したい。これまでの視覚的な荒涼とした風景は、「かれがれ」（草枯れ・虫の声嘸れ）という掛詞（韻文的技法）によって、たちまち聴覚世界へと一転している。さらに聴覚にしても「虫

の声」は「松風の音」へ、そして「琴の音」へと自然から人事に移っている。こんな短い文章でありながら、見事な転換の筆致である。しかも「松風の音」「物の音」には、村上天皇妃であった斎宮女御（徽子）が嵯峨野で詠じた、

琴の音に峰の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけん

（『拾遺集』四五一番）

が引歌として踏まえられている。

この斎宮女御は自ら斎宮に卜定され、斎宮を勤めあげた後で村上天皇の後宮に入内しただけでなく、斎宮となった娘（規子内親王）と一緒に伊勢へ下向した経験もあるので、御息所のモデルとされている人物である。本文には「親添ひて下りたまふ例もことになけれど」（83頁）とあるが、史実としては斎宮女御本人の例があげられる。「琴の音に」歌など、詞書に「野宮に斎宮の庚申し侍りけるに、松風入夜琴といふ題をよみ侍りける」とあって、まさに嵯峨野で詠まれた歌であった。それを踏まえているからこそ松風が寂しく吹き、その風に乗って遠くから琴の音が聞こえてくるという設定になっているのである。

もちろんただ遠くから「琴の音」が聞こえてきたのではなかった。御息所は源氏が来訪することを承知の上で、あえてその

時間を見計らって琴を弾いているはずだからである。この「琴の音」は、源氏を野宮深くへと、そして御息所のもとへといざなう御息所からのシグナルでもあったのだ^(一)。その「琴の音」に吸い寄せられ絡めとられるように、源氏は野宮に分け入っていくのである。最初はいいやや出向いた源氏だったが、この名文を通過することで、恋人のところに向かう男性へと変貌していることが読みとれる。

三、夕月夜

さて、源氏一行が野宮に到着すると、

はなやかにさし出でたる夕月夜に、うちふるまひたまへる
さまにほひ似るものなくめでたし。
(賢木卷87頁)

と、折から夕方の月(半月)が源氏の姿を美しく照らし出した(また視覚世界に戻っている)。これに関して新編全集の頭注一六には、「上旬の月で、夕方から出る。物語では、恋の訪問の場面に多用される」と示唆的なことが記されている。

「夕月夜」が恋の訪問場面に多用されるという指摘は首肯できるが、七日の月が「夕方から出る」というのはどうだろう

か。月の出を調べてみると、旧暦七日の月はもつとずつと早く、既にお昼には出ているとあった。そうでないと明け方以前に沈むことはあるまい。

もちろん明るいうちは太陽の光に押されて目立たなかつたけれども、夕方になって日が翳ったことで、月の光は輝きと存在感を増した。ここでは源氏の美しい姿を映し出す効果的な照明として、巧妙に「夕月夜」が利用されていると見たい(ただしそんなに明るいはずはない)。とすれば源氏はその効果を承知の上で、到着時間まで計算してやってきたとも考えられる。源氏にしても演出効果を狙っていたのであろう。

さてその時の源氏の衣装は、

ことごとしき姿ならで、いとう忍びたまへれど、ことにひ
きつくろひたまへる御用意いとめでたく見えたまへば、
(85頁)

であった。これについて新編全集の頭注二四には「外見をやつしているのとは逆に、心はこまやかに行き届いている」とある。これは「忍び歩き」と見ることで、服装をやつしていると解釈してのコメントであろう。しかし「ことにひきつくろひ」は、決して心だけではなさそうだ。なにしろ相手がハイセンス

な御息所であるし、これが最後の対面であることを考慮すると、源氏は精一杯センスのいいものを身に付けているのではないだろうか。「忍び歩き」という判断は、お供の人数からして同意できるものではない。

この源氏に対する称賛は、帰り際にも「ほの見たてまつりたまへる月影の御容貌、なほとまれる匂ひ」(90頁)とある。この記述から、源氏は衣装に香を焚きこめていたことがわかる。ただしここに「月影」とあることに注目してほしい。これを安易に帰り際に出ている月と見てはならない。何故ならば、それ以前に「月も入りぬるにや」(88頁)とあって、とつくに月は沈んでいるはずだからである。さすがに新編全集の頭注七では、「七日ごろの月の入りは早く、夜半のうちに没する」(同頁)と記されている(ただし前述の「夕方から出る」月とは矛盾する)。ということは、辺りは真つ暗だということである。

ここで前に「夕月夜」とあったことを思い出してほしい。

「夕月夜」と「暁闇」の関係については、古く『万葉集』に、

夕月夜暁闇の朝影にわが身はなりぬなれを思ふがに

(二二六四番)

夕月夜暁闇のおほほしく見し人ゆゑに恋わたるかな

などと歌われていた。夕月夜と暁闇がセット(対)になっているという以上に、「夕月夜」は「暁闇」の枕詞と見ることができ。要するに夕方に月が出ている時は、必然的に暁には月が沈んで暗闇になるということである。暁の始まりは午前三時なので、もともとあたりは真つ暗だった。その時刻の唯一の自然照明が有明の月なのだが、それは下旬の月では可能であつても、上旬の月は早く沈むので「暁闇」になるのである。歌の「朝影」は暁後半(夜明け)のか細い光であろうか。

『万葉集』の「夕月夜」が「暁闇」の枕詞になっているのに対して、『源氏物語』に「夕月夜」は七例あるが^②、和歌の用例は一例も見られなかった。『源氏物語』は「夕月夜」を散文化する中で、恋の訪問場面に使用しているといえる。例えば蓬生巻では、「艶なるほどの夕月夜」(344頁)に源氏は花散里を訪れようとしていた。また藤裏葉巻では、「七日の夕月夜」(439頁)に夕霧と雲居雁が逢っている。要するに恋人の元を訪れる時間が「夕月夜」なのである。

ここにさりげなく用いられている「夕月夜」から、読者はそういった対極的な情報まで読み取らなければならないのだ。

『源氏物語』を読むというのは、単にあらすじを知るだけではなく、こういった読みによってより多くの情報を知ることができるのだから、これは一方では楽しい読み解き作業でもあった。

四、櫛の懼り

そのことを踏まえて前述の「月影の御容貌」を考えると、これは帰り際の源氏の様子ではありえないことになる。ここは夕月夜に浮かび上がった昨夜の「うちふるまひたまへるさまにほひ似るものなくめでたし」という源氏の姿を回想・反芻していると解釈したい。なお清水好子氏によれば、この「月影の御容貌」という複合表現はこれ以前に見られず、紫式部の造語とのことである(3)。

源氏がどこまで意識して振舞っていたかはわからないが、物語はタイミングをはかったかのように、源氏の美しい姿を月明かりによって浮かび上げらせ、それを御息所側に効果的・印象的に見せ付けている。そう考えると、やはり源氏はやつした服装ではなかったと読みたい。

そういった効果的な登場の後、源氏は簀子上がり、廂にいる御息所と御簾越しに対面する。これが先の「物越し」の対面である。おそらく女房たちは気をきかして退出しているであろう。そこで源氏は、どこで用意したのか櫛を一枝中に差し入れて言葉をかける。

櫛をいささか折りて持たまへりけるをさし入れて、「変らぬ色をしるべにてこそ、斎垣も越えはべりにけれ。いと心憂く」と聞こえたまへば、

神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる
さかきぞ

と聞こえたまへば、

少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめて
こそ折れ (87頁)

すると御息所の方から『古今集』所収の「我が庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」(九八二番)歌を踏まえて「しるしの杉」と詠じている。それに対して源氏は、神楽歌(『拾遺集』所収)にある「榊葉の香をかぐはしみとめ来れば八十人ぞまとるせりける」(五七七番)を踏まえて返歌している。ここでは神楽歌の「香をかぐはしみ」を「香をなつ

かしみ」に改変しているが、これも梅野きみ子氏によって紫式部の造語と認定されている表現である(4)。どうも賢木巻には、『源氏物語』独自の造語がちりばめられているようである。それを発掘するのも楽しみの一つであろう。

源氏は、野宮という神域にふさわしい常緑の榊葉を提示することによって、そこに御息所に対する不変の心を込めている。『源氏物語』の中に「榊」の用例は、「榊」5例(葵巻1例・賢木巻4例)、「榊葉」3例(賢木巻1例・若菜下巻2例)の計8例用いられている。そのうちの5例が賢木巻に集中しているので、野宮神社を舞台に描かれる賢木巻は、間違いなく榊の巻といえる(若菜下巻は住吉神社の「榊葉」)。

ただし葵巻に「榊の憚り」(27頁)とあったように、神域(精進潔斎中)における逢瀬はタブーであった。そのことは源氏自身十分承知しているはずだが、それにもかかわらずここで御息所に異常接近しているのだ。

なおこの個所には『伊勢物語』七一段(神のいがき)の、
むかし、男、伊勢の斎宮に、内の御使にてまゐりければ、
かの宮に、すぎごとひひける女、わたくしごとにて、

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし大宮人の見まくほ

しさに

男、

恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道な
らなくに
(新編全集175頁)

が踏まえられているようである。同じく斎宮にまつわる贈答であるし、「神のいがき」を越える点とある点、「恋しくは」歌が同じく『古今集』の「我が庵は」歌を本歌としている点など、「榊」はないものの共通要素は多い(5)。

五、別れのための逢瀬

簀子にあがった源氏は、「御簾ばかりはひき着て、長押におしかかりてゐたまへり」(88頁)とある。これは御簾と御簾の隙間から廂側に顔を差し入れているのであろう。それがいかにも御簾を着ているように見えるので「はひ着て」なのである。

当初は簀子にいた源氏だが、別れの際に歌を詠んだ源氏は御息所の手を取っており、いつの間にか二人はかなり接近しているように読める。ここは御息所が簀子に接近しているというより、源氏が廂に入り込んでいるのではないだろうか。そしてい

よいよ「暁の別れ」になる。

やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに作り出でたらむやうなり。

あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな

出でがてに、御手をとらへてやすらひたまへる、いみじうなつかし⁽⁶⁾。風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、をり知り顔なるを、さして思ふことなきだに、聞き過ぐしがたげなるに、ましてわりなき御心まどひどもに、なかなかこともゆかぬにや、

おほかたの秋の別れも悲しきに鳴く音な添へそ野辺の松虫

悔しきこと多かれど、かひなかりければ、明けゆく空もはしたなうて出でたまふ。道のほどいと露けし。(90頁)

源氏の歌に「あかつきの別れ」とある点、これを素直に受け取れば、二人はそこで逢瀬を持ったと解するのが妥当であろう。だからこそ源氏は後朝の歌を詠じているのである(もちろん疑似後朝でもかまわない)。なおこの「あかつきの別れ」には、「御息所の伊勢下向による別れ」、あるいは「秋との別れ」

も含まれており、重層的な別れ表現になっている(鞆晦)。先に季節のずれを指摘したが、この「秋の別れ」(晩秋のイメーヂ)も同様である。あるいはこのために晩秋のイメーヂが付与されているのかもしれない。そうなると「秋」にはさらに「飽きる」意が掛けられていることになる。

すると「おほかたの」歌は、御息所が源氏に飽きられて悲しいと訴えているのだ。それが恋の常套であり、後の朧月夜の歌にも「明く」と「飽く」の掛詞が用いられていた。ただし「あかつきの」と「おほかたの」は、贈答らしい響き合いに乏しいようにも思える。この二首を源氏の歌とする方がすつきりするのではないだろうか。

それはさておきこの文章の少し前に、
月も入りぬるにや、あはれなる空をながめつつ、恨みきこ
えたまふに、こころ思ひあつめたまへるつらさも消えぬべ
し。(88頁)

と記されており、二人は「あはれなる空をながめ」とあった。これも別れに際して二人が並んで空をながめている点、典型的な「後朝の別れ」のシーンといえる。これによれば、御息所の方から端近外が見えるところまで出てきたことになる。もし

この時二人の間に逢瀬があつたのなら、源氏は神域（神の憚り）のタブーを犯したことになる。では源氏は、それによって御息所の下向を阻止するつもりだったのだろうか。

しかしその後の事態は何も変化していない。そうなるところは、悩める御息所を心安らかに伊勢へ下向させるための源氏のパフォーマンスだったと読める^⑦。野宮を訪れる前に、

つらきものに思ひはてたまひなむもいとほしく、人聞き情けなくやと思しおこして、野宮に参でたまふ。 （84頁）

とあつたからである。もちろん源氏にしても、自分を悪者のイメージのまま御息所と別れたくなかつたのであろう。

そう考えるとこの場面で源氏は、「心弱く泣きたまひぬ」（88頁）と涙を見せているのが目につく。源氏が意識的に演技しているとは断言できないものの、そういった源氏の涙ぐましい努力（演出）によって、御息所の苦悩も「こころ思ひあつめたまへるつらさも消えぬべし」（88頁）とあり、二人は円満に別れたことになる。ただしこれは草子地なので、御息所の本心かどうかはわからない。末尾に「道のほどいと露けし」とあるのは、源氏の涙を夜露に喩える情景一致の手法であつた。

ここであらためて考えてみたいことがある。野宮の一夜にお

いて、二人に逢瀬（実事）はあつたのだろうか、それともあくまで擬似後朝なのだろうか。ここで再度「夕月夜」に戻つて考えてみたい。

「夕月夜」に連動（呼応）するのが「あかつきの別れ」だが、源氏の歌にあるように「暁」に別れたとすると、その時は前述のように「暁闇」の状態、つまり月のない真つ暗闇だったはずだ。すると「やうやう明けゆく空のけしき」とあるのは、どう考えたらいいのだろうか。暁の始まる午前三時だったら空は真つ暗である。それからずっと時間が経過し、夜明け前のあたりが白んでくる時刻になっているとしたら、そこに源氏の未練が看取される。

単なる「明けゆく」ならば、日付変更時点と考えていいのだが、「空」とあるとどうしても視覚的に見たくなる。ただし「明けゆく空もはしたなうて出でたまふ」（90頁）と繰り返されており、実際に源氏が帰つたのは、人目を憚らなければならぬ時間が近づいてからだつた。

それでもまだ明るくなっていないとすると、最初の例はやはり午前三時の「明けゆく」ということになる。こういった描写によって、いかにも源氏は御息所との「後朝の別れ」を惜しん

でいるように読みたくなるのだ。読者に誤読を促すのも、『源氏物語』の描写の巧妙さといえそうだ。

六、「野宮」の「曙」の記憶

この件はそれで完結しているのだが、この別れの記憶は物語の中でしばしば想起される。例えば一年後に源氏は、

あはれ、このころぞかし、野宮のあはれなりしことと思し
出でて、
(賢木巻120頁)

と、御息所との別れを「あはれなりしこと」と思い出している。それだけではない。これが引き金となってさらに朱雀帝が齋宮下向のことを話題にすると、

我もうちとけて、野宮のあはれなりし曙もみな聞こえ出で
たまひけり。
(124頁)

と、源氏は野宮での一件を朱雀帝に「あはれなりし曙」として語っている。「うちとけて」とあるのは、源氏がつい心を許してしゃべったのだろう。

具体的な御息所との別れの場面では「あかつきの別れ」とあって、「曙」は用いられていなかった。それが回想の中では

「曙」として再提起されている。それはさらに源氏が須磨流謫から帰京した後、御息所の娘齋宮女御に対面して、

昔の御事ども、かの野宮に立ちわづらひし曙などを聞こえ
出でたまふ。
(薄雲巻459頁)

と語っているところでも「曙」となっている。さすがに三回目となると、「かの野宮」となっている。これらはみな他者に語っているのだから、源氏は野宮での一件を「あかつきの別れ」(後朝の別れ)とは口にできず、「曙」のできごととして語っているのかもしれない。その際決して「立ちわづら」つてなどい
ないはずだが、相手が御息所の娘なので虚構を交えて語っている
のであろう。というより、唐突に挿入されている、

殿上の若君達などうち連れて、とかくなる庭のただすまひ
も、げに艶なる方に、うけばりたるありさまなり。

(賢木巻89頁)

を踏まえることで、室内ではなく庭のことだとカモフラージュ
ユしている。

素直に読むと、「暁」と「曙」の時間帯は重なっている(互換性がある)ことになる⁽⁸⁾。もつとも源氏が「暁の別れ」であることを秘して、あえて「曙」と口にしたとすると、意図的

な使い分け（隠蔽）が行われたことになる。そうなるこの「曙」は、あくまで美的な情景であって、逢瀬の後という官能的なイメージはないことになる。

ここであらためて時間表現について押さえておきたい。かつて時間の推移はタテの流れとして考えられていた。一般には、
 暁↓しののめ↓あけぼの↓朝ぼらけ↓朝

ととらえられていた。確かに帚木巻の空蟬との逢瀬の場面でも、「暁↓しののめ↓あけぼの」とあって、これを時間の推移ととらえることもできる。同様に橋姫巻の垣間見場面でも「暁↓しののめ↓あけぼの」と推移していた。これだと「あかつき」と「あけぼの」は異なる時間帯に見えてしまう。

ところが最近の研究では時間の重なりに注目することで、ヨコ並び（時間の重なり）を考えるようになりつつある⁹⁾。帚木巻にしても橋姫巻にしても、同時時間帯と見ることは十分可能だからである。それもあって、タテ型の考え方が変わってきた。例えば「しののめ」と「あけぼの」は、必ずしも時間の違いではなく、「しののめ」が歌語で「あけぼの」は非歌語とされている。この視点が重要なのだ。ただし非歌語だった「あけぼの」が『源氏物語』以降歌語化されることで、かえって「し

ののめ」との区別が不分明になってしまった。そのためにかわりにくくなったのである。

次に「朝ぼらけ」に関しては、従来は夜明けに近いかなり明るい時間帯とされていたが、どう考えても暗い時間帯と思われる用例もあるし、「暁」題で「朝ぼらけ」が詠まれている歌もあって、かなり「暁」と重なっていることがわかってきた。その「朝ぼらけ」と「しののめ」にも重なりがあり、また「暁」と「あけぼの」にも重なりがあるということで、到底タテ系列では時間の重なりが合理的に説明できなくなったのである。

むしろ時間の重なりを考慮して、ヨコ並びに考えた方がよさそうである。というより、それぞれの時間表現には時間の幅があるため、必然的に重なりが生じることになる。たとえば「暁」は、最低でも午前三時から五時までの二時間ある。その暁が朝に連続しているとすると、「朝ぼらけ・しののめ・あけぼの」はすべて「暁」の時間帯に含まれるか、重なりを有すると考えた方がわかりやすい。

ただし物語では、あえて「暁」を「曙」と言い換えているので、発話者の意図を考慮することも必要であった。

まとめ

本論では賢木巻を例にして、源氏と六条御息所との「暁の別れ」が暁の時間帯（午前三時以降）であり、意外に暗い時間に男女が別れることを論じた。だからこそ月の下旬には有明の月が印象的であること、逆に「夕月夜」（月の上旬）には暁前新月が沈むので暗闇になっていることから、「暁の別れ」が午前三時過ぎの暗い時間帯であることを論じた。

さらに「暁」を起点にして、従来はタテ系に考えられていた時間帯を、あらためてヨコ系として考えるべきであることを提案したい。ただし源氏はその「暁」を「曙」といいかえていることから、これも「暁」と同じ時間帯、後半のやや明るくなる時間帯と見ることが出来る¹⁰。そうではなく、第三者に二人の逢瀬を知られたくないという判断が働くことで、あえて「曙」が選び取られているのであれば、単純にそれを同時時間帯とするのもためらわれる。

こういったややこしさが、物語の時間帯を複雑にしている原因なのであろう。時間帯はもつと慎重に分析しなければなら

るまい。

〔注〕

(1) 吉海直人「『住吉物語』の琴をめぐつて」國學院雑誌83—7・昭和57年7月（『住吉物語』の世界）（新典社選書）平成23年5月所収）

(2) 『源氏物語』の「夕月夜」は、賢木巻以外に桐壺巻・明石巻・蓬生巻・篝火巻・藤裏葉巻・浮舟巻に用いられている（計七例）。その反対が「暁月夜」（賢木巻と初音巻の二例）であるが、賢木巻にはその両方の用例が用いられている。

(3) 清水好子氏「作り物語から源氏物語へ」国文学17—15・昭和47年12月

(4) 梅野きみ子氏「光源氏の人間像―その「なつかし」を中心に―」椋山女学園大学研究論集人文科学篇30・平成11年3月、吉海直人・岸ひとみ「香をなつかしみ」考」解釈65—3、4・平成31年4月参照。

(5) 『伊勢物語』六九段「伊勢斎宮譚」では、ストレートに斎宮との禁忌が描かれているが、七一段では斎宮に仕える

女房の話（「好きごと」を「杉子と」と解釈）になってい
るし、賢木巻では齋宮の母となっており、齋宮との直接の
禁忌は避けられている。

- (6) 高田祐彦氏「和歌が織りなす物語」賢木巻序盤の構造
―むらさき56・令和元年12月では、「なつかし」の使用
に疑義を述べておられる。これは和歌の「香をなつかし
み」の本歌「野をなつかしみ一夜寝にける」（万葉集一四
二四番）の具現と見ることでもできる。

- (7) 室伏信助氏「源氏物語の構造と表現―「賢木」巻をめぐ
って―」『王朝物語史の研究』（角川書店）平成7年6月

- (8) 小林賢章氏「アサマダキ・アケボノ考」同志社女子大学
学術研究年報69・平成30年12月でも「同時性」の例として
あげられている。

- (9) 吉海直人「平安文学における時間表現考―暁・朝ぼらけ
・あけぼの・しののめ―」古代文学研究第二次27・平成30
年10月（本書所収）参照。なお『源氏物語』における用例
数は、「暁」六十五例・「朝ぼらけ」十九例・「曙」十四例
・「有明」十二例・「あけぐれ」十二例・「朝明」^{あさけ}三例・「し
ののめ」三例となっている。「曙」の用例が多い反面、「し

ののめ」の用例は少ない。

- (10) 薫も宇治の姉妹を垣間見た時間帯を、匂宮には「見し暁
のありさまなどくはしく聞こえたまふ」（橋姫巻153頁）と
告げているのに、八宮には「前のたび霧にまどはされはべ
りし曙に」（橋姫巻157頁）と告げており、「暁」を「曙」に
言い換えている。ここも姉妹の父である八宮に対しては
「曙」という表現が選り取られているのではないだろうか
（「暁」の垣間見を隠蔽している）。